

を取られたところでたいしたことじゃなかった。友人たちと一緒にいられることの方がずっとすばらしい。もうすぐかわいい留学生ステファニーはイギリスに帰ってしまい、僕たちは一緒に話せなくなってしまうのだし。

その次にステファニーと会って話せたのは十年後のことだ。再会の場所は、銃が厳しく取り締まられている街。彼女はイギリスの首都で映画批評家として働いていて、僕はロンドン大学に日本文化について講義しに来ている。僕たちはもう大人になっているけれど、僕はいまだに彼女がどんなにチャーミングか告げるのをためらっている。何杯かビールを飲んでから、僕たちは昔の話をなつかしく思い出す。でももうテーブルに飛び乗ったりしないし、テーブルに飛び乗ることについての曲を歌ったりもしない。そのかわり、テーブルに大きな丸いチーズを並べている。

映画批評家としてステファニーは、僕がいまだには北野たけしと同じトイレを使っている話を喜んで聞く。北野たけしは彼女にとってのヒーローなのだ。

ベトナムのポタージユでカラオケをする

趣ある日本テレビ麹町スタジオで撮影を終えて、午前一時五十五分の羽田発香港国際空港着のフライトに飛び乗る。機内ではフィリップ・ロスの小説を読み、それから数時間、この本の最初の数ページの手直しにとりかかる。香港に着くと、キャビンアテンダントが丁寧に、ベトナム行きの手続きが遅れていると教えてくれる。余った時間に中華レストランで豆腐とブロッコリーの朝食セットを満喫し、それからダークチョコレートバーを買う。ベトナムで三番目に大きい都市ダナンに着くと、空港には心地良い海の匂いが漂っている。荷物を受け取ってタクシーを呼ぶ。東京のように自動的にドアが開いたりはしないが、アメリカ人にとってはこういうのも慣れっこだ。

手動でドアを閉めてすぐ、運転手はエンジンをぐいっと踏む。手荒い出発をして空港からぐんぐん遠ざかる様子は、さながらモノコグランプリのよう。後部座席でスーツケースが暴れまわっているのに気づいて、僕はヘルメットが欲しくなる。シートベルトをきつく

締めなおす。

轟音を立てるオートバイ集団のあいだを縫って、車はすっ飛ばしていく。やがてこのカーレーサーばりの運転手は、初老の女性にぶつかりそうになる。女性は歩道のサンドイッチ売り場で卵を焼いていたところだ。タクシーはぎりぎりかわし、なんとか轢かずにすんだ(ダナンでの運転に慣れていない人間には少なくともそういうふうに見えた)。

僕たちを取り囲むのは、巨大なクレーンと建設中のビルの細長い骨組みの数々。「いっつもこんなに工事してばかりなの?」と聞いてみる。

運転手は熱のこもった返事をする。「ダナンは次のワイキキになるのさ! ハワイにあるものはここになんでもある。都市文化、美しいビーチ、おいしい食べ物。じっさい、観光局はすでに裕福な中国人をこの街にたくさん呼び込んでるよ」

都市の輝かしい未来について得意げに話しながら、運転手はちよつとのあいだハンドルから両手を離して、ダッシュボードをとんとん叩く。今度はブーブーいうオートバイ集団に突っ込んで被害者を生んでしまいそうになって、運転手はようやくハンドルを握りなおす。クラクションを鳴らし返しながら、ベトナム語でバイク乗りたちに文句を言っている。

ホテルに到着すると、旧宗主国の言語であるフランス語で勢いよく挨拶された。「ボン

ジュール、ムッシュ・チョジイイイク!」

びっくりしつつ、中学から大学までずっと勉強してきたのにほとんど話すことができないう言語で答えようとする。「あ、イエス、じゃなくて、ウイ」

フロント係はにっこり笑ってルームキーを渡してくれる。それから今度は英語とフランス語の混じった言葉で、さつきよりゆっくり話し出す。「イエス、ヴォートルシャンブル、イズ、アー、オサンキエムエタジュ、フロア (Yes, votre chambre is, uh, au cinquième étage-floor.)」

「ソオオオリイ、フランス語うまくなくて」僕が言う。「部屋はサンキエム……五階?」

「ウイ、サンキエム」

フロント係はフランス語混じりをつづけるけれど、僕のリスニング能力は低いし、彼女の発音は、子どものころから崇めていたジャン・リュック・ゴダール映画のパリジャンたちのアクセントとも違っている。

話の多くを把握できずにいるうちに、彼女がどうやら美しい「ポタージュ」について説明しているのがわかってくる。スープの話は気になった。もう何時間も、チョコレートバー以外にも食べていなかったのだ。

「ちよつとすいません、近くに大きな『ポタージュ』があるって言ったの?」

「イエス、ムツシュ」

「フォーミたいな？」

「ノー、ムツシュ」

ふたりとも混乱しているみたい。それから僕は、彼女が言っているのは「海」を意味する「プラージュ (Plage)」かもしれないと気づく。でも、もしかしたら大きなスूपだつて近くにあるかもしれない。そう思うと、僕の空腹感と好奇心が刺激される。

「サンキュー」とフロント係に言つて、荷物を預ける。これで、周囲にあるのが観光客を惹きつける奇跡のスूपなのかどうか、すぐたしかめに行ける。

ホテルから出ると、いつのまにかもう外は暗くなりはじめている。あたりを歩いてみて、自分がただひとりの観光客であるような奇妙な感覚になる。まったくひと気のないカラオケ店を二軒見つける。張り出した屋根の光沢とシャンデリアの派手さから見ると、どちらも新しそうだ。タクシーで聞いたように、中国から観光客が押し寄せるのを見越して建てられたのかもしれないけれど、どこにも中国人は見当たらない。

さらに数分歩くと、遠くの方に人がぶかぶか浮かんでいるのが見えた。どうやらポタージュじゃなくてプラージュみたいだ。暗かったし視力も良くないけれど、近づくにつれて、無数の中国人たちが泳いでいるのがわかった。真つ暗な水中に、これほどたくさん怖い者

知らずの人々がいるところを見るのははじめてだったから、安全なのか心配になる。こんな時間にはライフガードも働いていない。緊急の助けを必要としている人がいないか、僕は慎重に目を凝らす。

素人ライフガードとして、いまや海であるという確信がすっかり強まった一帯のパトロールをつづける。けれど、四十秒か五十秒くらい経ったところで、スूपについて考えすぎてお腹ぺこぺこだったのを思い出す。

どこからか歌声が聞こえてきた。僕はあたりを見まわす。レストランがあるのかも。ビーチの向こうに、またしても空つぼのカラオケがあった。まろやかな青い光に、大きなオーブンバーに、ガラス張りの壁。なかには誰もいない。それでも、この歌声はまちがいないカラオケだ。スナックが密集した東京の狭い路地を歩いているときに聞こえてくるみたいに、たくさんの人が同時にマイクで合唱している感じ。

遊び好きのベトナム人サラリーマンたちが、ネクタイをおでこに巻いて騒いでいるのかな。かわりに見つけたのは、ビーチにいる若者の小さなグループだった。自前のマイクとバッテリー駆動のスピーカーをオートバイに取り付けている。

その騒ぎの場に何歩か近づくと、男性ふたりと女性ひとりが陽気に「ハロー！」と挨拶してくる。みな膝丈くらいのプラスチックの椅子に座っていて、一緒にカラオケをしよう

と僕を誘ってくれた。巨大なスピーカーがバイクのジャックに接続されていて、マイクとスマートフォンが Bluetooth かなにかでつながっている。

プラスチックの小さな赤い椅子に座ると、ひとりがビールを、ひとりがコココーラを、もうひとりがタバコをわたしてくれる。それらを膝の上に危なっかしく置いて、僕はお返しにあげられるものがないことを詫言。お金を払おうとすると、全員が首を横に振る。「ノー！ ノー！ ノー！」

僕は受け取ってほしいと願っている。「イエス！ イエス！ イエス！」。けれどこの若きベトナム人コミュニティたちは、お金に執着がないみたい。

「シング、シング！」とうれしそうに言う。

「僕はあとで」と言って、ビールの缶をあける。若者のひとりが選んだ曲は、日本の演歌とアメリカのカントリーをほんのちよつと混ぜあわせたような歌。彼は歌いながらタバコを口に入れると、曲が終わるまでくわえたままだった。タバコが落ちることもなければ、歌声に影響することもない。アメリカか日本で子どもが使うような、小さくて赤いプラスチック椅子に座っている点をのぞけば、その見事なタバコの吸いっぷりによって彼の姿はすぐくクールに見える。

選曲用のスマートフォンのアプリと一緒にマイクが僕にまわってくる。どうやって曲を

選ぶかを教えてもらって、僕はなんとなくボブ・ディランの「ライク・ア・ローリング・ストーン」を選択した。曲が発表された年である一九六五という数字が、スマートフォンのスクリーンに表示される。

一九六五年といえば、ベトナム戦争のほぼ折り返し地点であることがふと頭に浮かぶ。ディランがこの曲を書いたのは、この国に爆弾が降り注いでいるときだった。そして、アメリカでも日本でも、戦争をとめようと、平和を訴える抗議運動が巻き起こっていた。その活動の一部は、ディランに共鳴するかたちで生じたものだ。

僕はディランを歌いだす。ふつうなら洞察力あふれる知的な歌詞に聞こえるが、僕の口から出てくるとなんだかまぬけに響いてしまう——メッキの馬とか、シャム猫を肩に乗せた外交家なんかが登場する。

ディラン以外が歌うと変なふう聞こえる歌詞を歌いながら、ベトナムでできたばかりの親切な友人とこうやってビールを飲めるというのはなんて平和なんだろうと思う。

けれど、仲間たちにそれを伝えることができないから、音楽に合わせて歌ったり笑ったり手を叩いたりした。一時間くらい経って、新しい友人たちに「さよならしなくちゃ」と告げると、三人はジェスチャーで Facebook 用のセルフイーを撮ろうと伝えてくる。

僕たちはピースサインをつくって、フラッシュありとなしの写真を撮った。みんなと別

れて、ベトナム風フレンチブレッド卵サンドを食べてから、いくつもの空っぽのカラオケ店を通ってホテルまで歩いて帰る。フロント係に近所のポタージュが素敵だったことを伝えると、彼女は「ウイ、ムッシュ」と言う。

執筆作業を少し進めて、眠りにつく。東京での暮らしの夢を日本語で見る。アメリカの暮らしを英語で夢見ていたところからずいぶん長い時間が経ったことに、朝起きてから気づく。

サウナ、プリン体、秘密のタトゥー問題

東京のジムで、ランニングをしてからサウナに入る。いつもより暑く感じるのは、映画の役のために生やした髭が顔じゅうに伸びているせい。

僕の祖父くらいの年齢の男性がふたり、サウナの木のベンチに座っている。僕もそこに加わった。ひとりは胡坐をかいて、自分の足をマッサージしている。にっこり微笑んで、僕に「おはよう」と声をかけてくれる。

僕も「おはようございます」と挨拶を返す。それからなんとなく、その男性のポーズと足マッサージのやり方を真似してみる。その人は親指をかかとの方に曲げて、くるくるまわしている。僕も同じようにする。ちよつとくすぐったい。

サウナにいたもうひとりは、自分の足をこすっていない唯一の男性となった。年齢は九十歳くらいに見える。英語で元気よく「ハロー！」と声をかけてくれる。それから日本語でこう付け加える。「いつもテレビ観てるよ。さぞかしお金持ちなんだろうね！」